

# 仏は救われて 重要文化財に

# 香取遺産

Vol.52



▲十一面観音菩薩坐像懸仏



▲釈迦如来坐像懸仏



▲薬師如来坐像懸仏



▲地藏菩薩坐像懸仏

牧野の古刹観福寺が所蔵する懸仏4軀（釈迦如来坐像・十一面観音菩薩坐像・地藏菩薩坐像・薬師如来坐像）は、鎌倉期懸仏の最高傑作として広く知られています。

これらの仏像は、神仏分離令により香取神宮から取り出され、市人に売られてまさに吹き潰されんとするところを「おいたわしや」とこれを買った人が台座などを莊嚴して、明治2年（1869）の初秋に観福寺に納めたときれています。

懸仏は神仏習合、すなわち日本の神々は皆、衆生を濟度する仮の姿であり、本体は諸仏・諸菩薩であるとす思想（本地垂迹説）によって作られたと考えられています。

それまで、神道で御神体とされていた鏡に本地である仏像や梵字を毛彫したものがそ

の始まりで、古くは御正体とよばれ平安時代末から室町時代に掛けて盛んに作られ社寺へ奉納されました。

釈迦如来坐像懸仏（像高35・8 cm、鏡板径60・8 cm）と十一面観音菩薩坐像懸仏（像高40・4 cm、鏡板径60・9 cm）は鏡板裏面の刻銘により、弘安5年（1282）に香取神宮本地仏四体の内として、天長地久・当社繁昌・異国降伏・心願成就を祈念して造立され、香取社に奉送されたものであることが分かります。

「異国降伏」は、いわゆる「元寇調伏」のことです。

地藏菩薩坐像懸仏（像高33・3 cm、鏡板径61・9 cm）は鏡板表面の刻銘によれば、延慶2年（1309）に香取社の大禰宜大中臣実胤が亡父実政と海雲比丘尼らの追善供養のために造立・奉納された

もので、先の弘安5年から27年後のことになります。また、般若心経と観音経を供養のために読誦したともあり、弘安5年の造立の目的とはまったく異なっています。

薬師如来坐像懸仏（像高33・4 cm）は当初の鏡板が失われているために制作の目的は不明ですが、肉髻珠・白毫がないことや台座装着用の柄の作りが異なるなど、釈迦如来・十一面観音菩薩と一具の造像ではなさそうです。

弘安5年に制作された4体の内2体、おそらく地藏菩薩・薬師如来が何らかの事情で失われ、後にこれら4体が一具として祀られるようになったものと思われま

す。大正2年（1913）国宝に指定。現在は重要文化財。問い合わせ 生涯学習課 ☎(50)1224